



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	かな表記の違いによるイメージ伝達効果の差異
Author(s)	石原, 次郎
Citation	独語独文学研究年報, 31, 13-29
Issue Date	2004-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26155">https://hdl.handle.net/2115/26155</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P13-29.pdf



# かな表記の違いによるイメージ伝達効果の差異

石原 次郎

## 1. 研究の前提

### 1-1. 言語的情報と視覚的情報

書かれた文字、書字の視覚的側面(フォント)が、書字の伝達する意味情報とのインタラクションによって、書字にイメージ情報をつけ加えていることは、石原/熊坂(2002)で確認された<sup>1)</sup>。

ある特定の書字は、それが有するフォントの視覚的な特徴とともに受容されており、したがって書字の受容は、意味情報と視覚的な情報の双方による相関的なプロセスである。石原/熊坂(2002)は、視覚情報が、書字に新たな意味を付加するほどの影響力さえ持つ可能性を確認した。あるフォントが与える視覚情報は、つねに特定のイメージと結びつくわけではなく、フォントから生産されるイメージは、書字の意味情報、他のフォントとの対照、そのフォントの慣習的な使用についての記憶、という3つの相互作用のいずれか、あるいはすべてが起きることによる。

こうした情報伝達のモデルは、下図によって簡略に示すことができる。

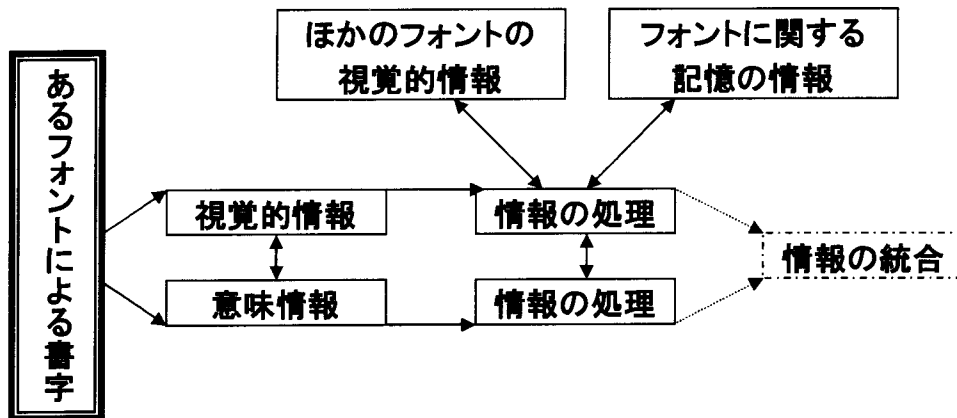


fig. 1 : 書字の情報処理モデル

視覚的なイメージ情報の影響が、フォントの違いなどの形態的な面だけには限定されないことは、容易に予測できる。色の違い、大きさの差などが、書字の受容に大きな影響を与えることは、グラフィックデザイナーの世界ではむしろ常識であろう。こうした視覚的イメージ

に関する調査は、言語の研究がいまだに意味的な側面にだけ限定されている現状では非常に重要である。

石原／熊坂(2002)では、書かれた言語の視覚的な側面の受容が、なんらかのイメージの生産に関わっており、書字の受容はさまざまな知覚情報の複合的な相互作用によるものであることが確認された。

## 1-2. 表記の差と文体

さらに、形態とは限定されにくい視覚情報—特に日本語に頻繁に現れる表記法の差異—が言語の受容に与える影響の研究は、とりわけ文学研究の分野において、非常に重要な意味を有している。表記法は、直接文体と関わっているからである。

先日、知り合いの女性編集者から怖ろしい話を聞いてしまった。彼女は学生時代に 20 歳年上の男性とつきあっていたらしい。ふたりはとてうまくいっていたのだが、あるとき、彼から来た 1 通のメールをみて、彼女は「醒めてしまった」のだという。

問題はメールの最後の一文にあった。

がんばってネ。

これを見た瞬間に、「あ、駄目、と思ったの」と彼女は言った。

何のことだか、私にはぴんとこない。「がんばってネ」、ごく普通の挨拶ではないか。

「どこが駄目なの？」と私は訊いた。

『ネ』ってどこ

『ネ』？」

「うん」

『ネ』のどこが駄目なの？」

「昔のひとつで感じでしょう？ それまで年のこと全然意識してなかったけれど、これみた瞬間に、やっぱり中身はおじさんなんだなあって思っ」

そう云われても、現におじさんの私にはまだ納得がいかない。

「じゃあ、どうだったらいいの？」

「ここは『ね』でしょう」

彼女はきっぱり言い切った。

穂村 弘(詩人)

日本経済新聞 2004 年 8 月 8 日朝刊 「ね」の未来

悲哀すら感じるこのケースから、単なるかな表記の違いが、どんなに雄弁かがよく分かる。たった一文字のカタカナが、年齢差、世代差というイメージを表示するものとして働いてしまった。シニフィエだけに注目すれば、このようなイメージ差は決して見えてこない。かといって従来の修辞学、とりわけ文体論は、言語のシニフィアンがこうした強いイメージの伝達

力を持っていることを、またその原因を、はっきりと説明してはこなかった。修辞学は、こうした現象を形態論的に羅列するか、その統計を取って言語史的な外観を無意味に気取るか、あるいは最悪の場合、隠喩などの一時期はやった現象に比べてあまりにも周縁的だとして取り合おうとしないか、である。また、文体論がこうした現象を取り上げるにしても、それはもっぱら文章論、作文術といった方面からで、そもそも言語の表記そのものが意味に関わる大きな伝達能力を有している点に焦点を当てた研究は存在していない。

日常的には、表記の違いははっきりと認知されていて、立派な伝達の要因として活用されている。先ほどの「がんばってネ」の例は、恋人と別れるという、あまりにも大きな帰結を生んだ例だが、これほどあからさまではないにしても、表記の差が生み出す力はいたるところに転がっている。

「切れる／きれる」に対する「キレル」などは、すでに意味の棲み分けもした端的な例だが、このように明らかにシニフィエを操作する意図だけでは片づけられない例は、たとえばよく雑誌に現れる「かわいい」と「カワイイ」、「すてき」と「ステキ」、「すごい」と「スゴイ」、「ださい」と「ダサイ」、スーパーのポップなどでよく目にする「たまご」と「タマゴ」、「さんま」と「サンマ」など、それこそ枚挙にいとまがない。こうした表記の差は、いったいなぜ使用されるのか。

文学の場合なら、たとえば人称を「ぼく」と表わすか、それとも「ボク」と表わすか、「かれ／かのじょ」とするか、「カレ／カノジョ」にするか、などは、テキスト全体の印象をコントロールする決定的な要因になりうるほどの影響力を有している。

こうした現象は、明らかに修辞的であり、テキストの伝達性そのものに関与している。そしてかな表記の差異が生み出す伝達内容の差異は、非常に大きい。こうした伝達性、あるいは伝達の差異性が、いったい純粋に言語学的なものに、それとも社会言語学的な何かに、あるいはまた、視覚に関わる認知心理学的な要因に起因するのかは、従来の研究ではまったく判然としていない。現象の豊富さ、現象の影響力の大きさに対して、あまりにもその研究は貧弱である。まして、伝統的な修辞学のように、現象の類型学に終始するだけでは、現象そのものの本質を捉えることはできない。

### 1-3. 仮説

こうした現状から、私がここで提出する仮説はとてもシンプルである。

**仮説一 かな表記の差異は、それが伝達するイメージの差異を生み出す。**

**その差異は、書字から生じるほかの諸情報とインタラクティブに作用する。**

**結果、かな表記の差異は、伝達内容の差異まで生じさせる可能性がある。**

この仮説を確認するために、調査を実施した。

## 2. 調査

### 2-1. 調査の内容

かな表記の差を測定するために、fig.2にある、非常に単純なサンプルテキストを提示した。

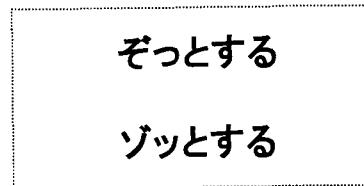


fig. 2 : 提示したサンプルテキスト

このテキストに対して、47項目にわたる質問票に5段階評価(「強くそう思う」、から、「全然そう思わない」、まで)で回答してもらった。

<被験者> 北大生 121名。(男子 61名、女子 60名)

平均年齢 19.37歳(18~24歳)

<実施日> 2002年6月

<質問項目> 以下の6つの要因に関する47項目をランダムに並べ替えた。

提示したテキストが非常に単純で、コンテキストを一切排除してあるため、各質問項目はきわめて具体的なものとした。

例： 浮気の現場を押さえられた時のような現実的な恐怖／幽霊を見たり、心霊現象に出会ったときのような、現実にはあり得ないことへの恐怖

恐怖の強度： どちらがより強いのか

恐怖の質： 現実的／非現実的、伝わる恐怖の速度、回避は可能／不可能、実体性がある／ない

感覚の差異： 生温かい／冷たい、不潔／不気味、湿った／乾いた、ぐにやりとした／鋭くてとがった、鳥肌が立つ／立たない

文化的差異： 日本的／洋風、古臭い／今風

ジャンルの差異： 小説／マンガ

性差： 男性が用いる表記／女性が用いる表記

### 2-2. 単純集計

被験者数が121名と少ないため、単純集計量はあくまでも参考となる指針であるが、単純集計からも、いくらかの傾向を読み取ることはできる。

顕著な数値が出たのは、性差に関してだった。「ぞっとする／ゾットする」どちらを男性が使いたがり、どちらを女性が使いたがるか、との設問に対して、「ぞっとする」=男性／「ゾットする」=女性、と回答したのは113名、全体の93.4%だった。また、「ぞっとする」=女性／「ゾットする」=男性、と回答したのは108名、全体の89.3%にのぼった。うち、両方の設問に対してそうだと重複回答したものは102名だった。これに対して、性差は無関与か、との問いに対して、そうだと答えたのは86名、全体の71.1%にのぼった。(fig.3) どの回答に関しても、女性と男性に大きな差はなかった。

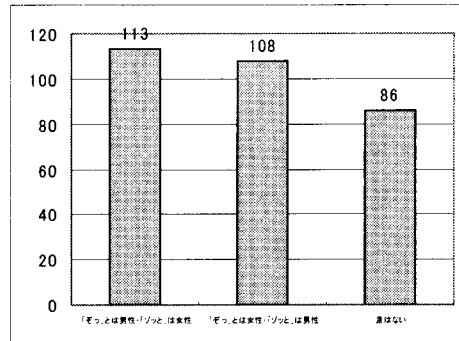


fig. 3 : 性差

単なる統計量として観察すると、この結果は矛盾しているように思われるが、じつは、被験者の相当数が表記の差を確実に感じる一方で、どの表記がどちらの性にかたよるかに関しては、判断がゆらいでしまっている、と推察できる。差はない、との重複回答が多かった点については、<アンケートがあえて性差を問うたために差を感知はしたが、日常的にはその差はさほど大きく現れない>という意識の現われと考えられ、したがって表記の差が生み出すイメージの差は、潜勢的なものにとどまっていると思われる。性差に関しては、表記との相関性をかなり感知できるが、ひとつの表記とある性との強固な関係は特定できないという結果となった。

質的なイメージ差にかなりの相関が認められたのは、つぎの2項目である。

「ぞっとする」は、現実にはありそうな事件（浮気の現場を押さえられる）への恐怖だと回答したのは79名、65.3%だったのに対し、「ゾットする」は現実にはありそうにないもの（幽霊など）に対する恐怖だと回答したのは71名、58.6%だった。(fig.4) それに対して、差はない、との回答は66名、54.6%だった。同様に、回避できる恐怖か否かに関しても、似たような傾向が認められる。(fig.5)

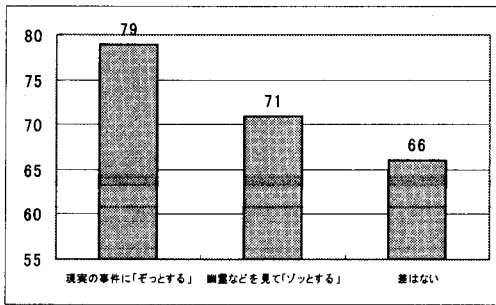


fig. 4 : 現実／非現実に対する恐怖

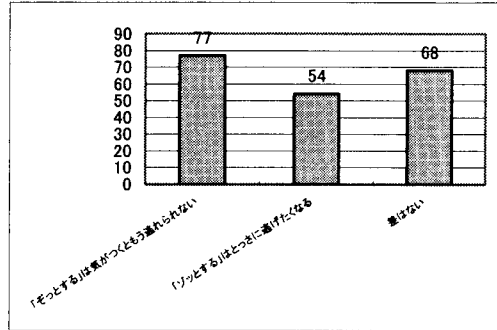


fig. 5 : 回避できるか／できないか

このふたつの統計量から、「ぞっとする」のほうが、どちらかという現実的な事件の現場を押しえられた、というイメージを伝達しやすいように見受けられるが、どちらの表記にも差はないと回答した被験者も多く、やはり個人的なゆらぎがあると考えてよい。

感覚イメージの差に関しても、ある程度の相関性が認められるものの、注意を要する項目群が出てきた。

「ぞっとする」には不潔さや不衛生さ(引き出しの中に去年のタコ焼を発見)を感じ、「ゾットする」には不気味さや気色の悪さ(ゴキブリやゲジゲジ)を感じるか、との設問に対する回答は、fig.6のとおり結果となっている。また、どちらの表記がじっとりとして湿った感じか、に対する回答は fig.7に示してある。

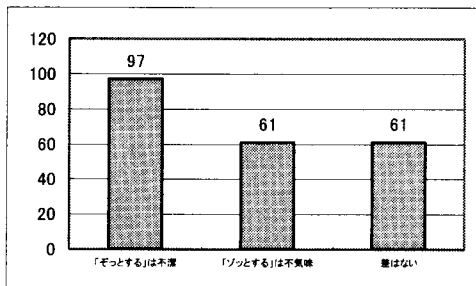


fig. 6 : 不潔か／不気味か

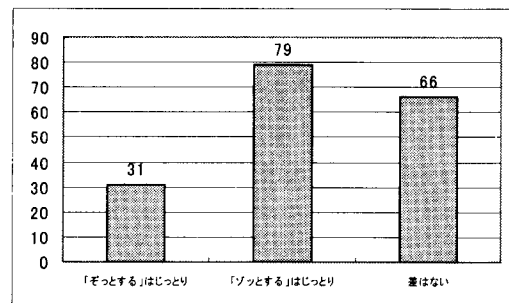


fig. 7 : じっとり湿った感じ

先ほどと同様、これもどちらかのイメージに集団的に偏るといよりは、個人差が大きいと考えたほうがよい。ただ若干興味深いのは、不潔感とじっとりとした湿った感じが、表記の差においては相関していそうにない点である。詳述はしないが、クロス集計でも、不潔感とじっとり感の双方に「そう思う」と回答した者は少数にとどまっている。

文化差に関する設問、「ぞっとする」は古臭い感じで、「ゾットする」は今風の感じ、という設問に解する回答は、fig.8に示してある。

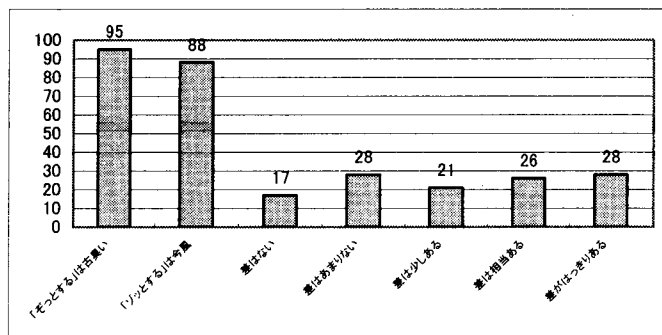


fig. 8 : 古臭い／今風

この設問に関しては、集団的にイメージの差に顕著な傾向が出ているが、ふたつの表記に差はあるか、との設問に対しては、グラフに示されるように、その判断は非常にばらついたものとなった。

ジャンル差に関しては、fig.9のような結果となった。

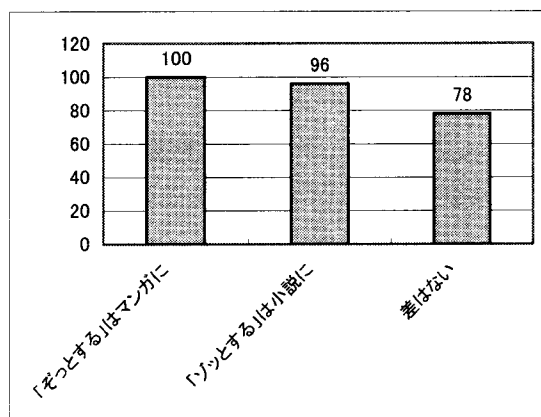


fig. 9 : マンガか小説か

これもまた、かなり顕著な傾向は認められるものの、やはり差はないと回答した被験者も多数いることから、個人差、あるいは想定されるケースによる判断のゆらぎを考える必要がある。

単純集計の結果からうかがうことができる傾向をまとめてみると次のようになる。

	ぞつとする	ゾツとする	差はない
(性差)	男性が使う	女性が使う	71.1%
(質)	現実的な恐怖	非現実的な恐怖	54.6%
(質)	回避不能	—	56.2%
(感覚)	不潔	(不気味)	50.4%
(感覚)	—	じっとり湿った	54.5%
(文化差)	古臭い	今風	14.0%
(ジャンル)	マンガ風	小説風	64.5%

table 1 : 単純集計に見られるイメージ差

いずれの設問でも、それなりに傾向が出ているように見えるが、じつは表記の差にイメージの差はないと答えた被験者も相当数いたり、また古臭いか今風か、との設問に対する回答のように、差があるかないかで回答が分散したケースもある。したがって、表記の差が、集団的にある固定したイメージへの傾向を示すという判断はできない。むしろ、表記の差がイメージの差に結びつくことは明瞭だとしても、そのイメージには個人差と、さらには個人が想定する場面のゆらぎが大きく関わっていると考えべきである。また、このゆらぎは潜勢態であり、それが顕在化するためには、なにか他の変数の存在が想定される。

### 2-3. 因子分析

つぎに、因子分析によって表記差とイメージ差の相関性を探ってみる。回答の全体を因子分析にかけた結果は、table 2 のような結果となった。

設問	1	2	3	4	5	6
「ぞ」は実体がある*	.796	-.110	.224	.125	.189	-2.432E-02
「ゾ」は実体がない*	.889	.212	.117	.111	1.461E-02	-6.247E-02
差はない	-.865	-2.651E-02	9.714E-03	-.204	-4.014E-02	-1.445E-02
「ぞ」は鳥肌が立つ	-4.616E-02	-.751	.231	.262	.221	8.371E-02
「ゾ」は鳥肌が立つ	6.572E-02	.849	-2.816E-02	.150	-1.201E-02	-7.370E-02
差はない	.134	-.260	-7.095E-02	-.386	3.629E-02	-.184
「ぞ」はぐにやり	3.757E-02	-.179	.665	.126	.245	-3.038E-02
「ゾ」は鋭く尖った	9.162E-02	.124	.803	3.175E-02	-7.194E-02	-1.496E-02

差はない	-0.157	.219	<b>-.637</b>	-4.208E-02	-.126	-4.719E-02
「ぞ」は回避不能	.323	-.179	5.247E-03	<b>.717</b>	.107	-7.198E-02
「ゾ」は回避可能	9.496E-02	.240	.277	<b>.727</b>	5.399E-02	-3.141E-02
差はない	-.135	5.425E-03	-4.838E-02	<b>-.820</b>	-1.390E-02	3.734E-03
「ぞ」は日本的	.185	-.100	.141	.133	<b>.787</b>	-5.046E-04
「ゾ」は洋風	5.015E-02	.144	.173	-1.851E-02	<b>.822</b>	-.149
差はない	-9.471E-03	.134	8.465E-02	-4.998E-02	<b>-.779</b>	8.363E-02
「ぞ」は小説風	-1.348E-02	-.153	8.013E-02	-9.059E-02	-3.079E-03	<b>.802</b>
「ゾ」は漫画風	7.504E-02	.118	3.839E-02	-2.091E-02	-.204	<b>.799</b>
差はない	9.925E-02	4.097E-02	6.293E-02	-1.178E-02	7.731E-02	<b>-.862</b>

Kaiser の正規化を伴わないバリマックス回転 (p<0.0001)

\*「実体がある」 = 掃宅すると見知らぬ誰かが明らかにいる！など

\*「実体がない」 = 掃宅すると見知らぬ誰かがいた気配がする、など

table 2 : 因子分析

これをまとめると、表記差には、少なくとも次のイメージの因子が関与していることになる。

	ぞっとする	ゾットする
(質)	実体がある	実体がない
(感覚)	鳥肌は立たない	鳥肌が立つ
(感覚)	ぐにやりとした	固くて鋭い
(質)	回避不能	回避可能
(文化)	日本風	洋風
(ジャンル)	小説風	マンガ風

table 3 : 因子分析によるイメージ差

「ぞっとする」のほうは、何か有機的で生暖かいものがある気配にじわじわと恐怖を感じて、気がつけばもう逃げられない、というイメージを伝達すると思われる。それは何がしかの実体をともなっており、たとえば江戸川乱歩の小説のような、なにかたちの悪い人物に追いつめられていくような感じだろうか。

「ゾットする」は、得体の知れない、冷たく固く鋭く、怪我をしそうなものへの生理的な反応の強い瞬間的な恐怖、というイメージを伝達すると思われる。それはどことなく劇画的であるようだ。

## 2-4. 考察

実態調査の結果から、推察できる点はずぎのことである。

まず、単純統計あるいは因子分析は、表記差とイメージ差の、集団におけるある程度の相関性は示唆しているが、表記の差によってあるイメージを強く連想させられるその同じ個人が、表記の差にイメージの差は感じられないという回答も同時に行なっているケースが多数ある。この一見矛盾するようなデータを、先ほどからゆらぎと呼んできたが、このゆらぎの意味するところは、表記の差がイメージの差を生産するための優先的な変数ではないこと、また、単に表記の知覚的な側面だけが変数群を構成するわけではないこと、であると思われる。

単純集計に現れる傾向と、因子分析の結果から、他の変数を推察してみると、次の点が浮かび上がってくるだろう。

まず、ひらがなとカタカナとを構成している線の特徴が挙げられる。曲線が多く見られるひらがな「ぞっと」に対して、直線的で先端部が鋭い感じがする「ゾット」という、形態の認知から生じるとされるイメージ差を想定できよう。それが、「ぞっとする」ではぐにやりとした不潔なイメージ、「ゾットする」では固くて鋭い、という感覚的なイメージの差につながっていると思われる。ただ、単純集計を見るかぎり、ぐにやり、不潔などと通じそうな、じっとり湿った感じというのは、むしろカタカナ表記にあるとする回答が多いのは興味深い。

表記の差が、描線のスピード、あるいは聴覚的な感覚差に翻訳されて、イメージ生産の担い手になっていると考えられる点もある。「ぞっとする」は、じわじわと迫り来る恐怖感で、鳥肌が立つわけではない、というイメージの傾向があるのに対して、「ゾットする」では、とっさに逃げ出したくなる恐怖感で、鳥肌が立つというイメージが優勢だというのは、ひらがなの曲線的な描線と、カタカナの直線的な描線との、描線速度という運動イメージ、さらにその影響を受けた聴覚的な速度差として、イメージ生産に影響を与えている可能性がある。

文化差に関しては、やはり、日本語においては外来語、とりわけアルファベット圏のことばがカタカナで表記される、という慣習が大きな影響を与えていると思われる。したがって、「ぞっとする」は日本的、あるいは古臭いといったイメージとの親和性があるのに対して、「ゾットする」は洋風、あるいは今風というイメージとつながりやすいのだろう。

近年のホラー映画などの影響も見逃すわけにはいくまい。日本のホラー映画が、どちらかという怨念や因縁などを前面に押し出して、まさにじわじわと怨霊なり幽霊が迫り来るシーンが多く、さらにレトロな舞台設定や撮影法などを多用する。さらにその背景には、日本の怪談に特有の、なんともおどろおどろしい語り口の伝統がある。これに対して、日本に

大量に流入しているアメリカ製のホラー映画では、怪物や、幽霊にしても怪物じみたキャラクターが多く登場して、しかもその襲撃はスピード感にあふれている傾向がある。こうした受容経験の差が、「ぞっとする」の和風で古臭く、有機的で不定形でじわじわとして緩慢な恐怖感と、「ゾットする」の洋風で今っぽく、ナイフやチェーンソーなどを連想させる固くて鋭い危険と、その攻撃の素早さなどに関連しているとも考えられる。

こうした背景的な推察は、とりあえず fig.10 のフローチャートで図示できよう。

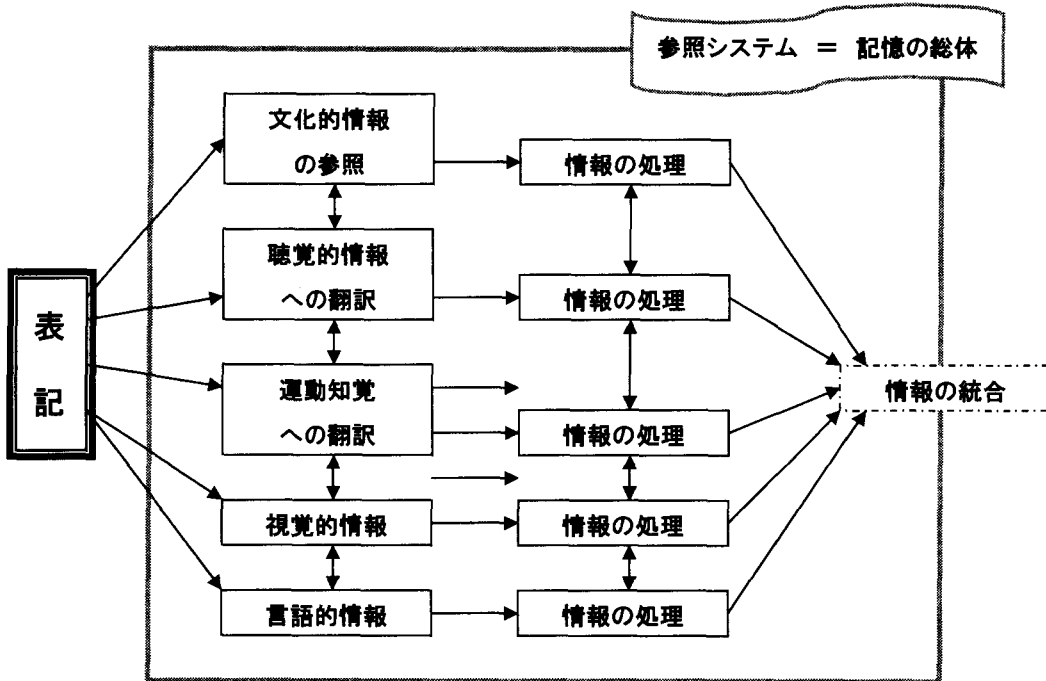


fig. 10 : 表記の情報処理モデル

あるいは、情報処理が、多変量によるきわめて複合的なネットワークである点を考慮すると、次ページのようなネットワークモデルを想定したほうがよいかも知れない (fig.11)。

こうした推察から、個々の想定しうる要因に関して実験なり調査なりを積み重ねていって、交錯している各要因間の相関性を洗い出す作業にはそれなりの意義があるだろう。

しかし、調査の過程で明らかになったことはやはり、表記の差が、集団的なイメージ生産の統計量として、ある種の傾向性を示すという点ではなく、むしろ個人差、そして同じ個人におけるイメージのゆらぎのほうだろう。また、イメージ生産があくまでも潜勢態であり、他の要因、たとえば文脈などに依存して顕在化する、ということも推測できる結果となった。

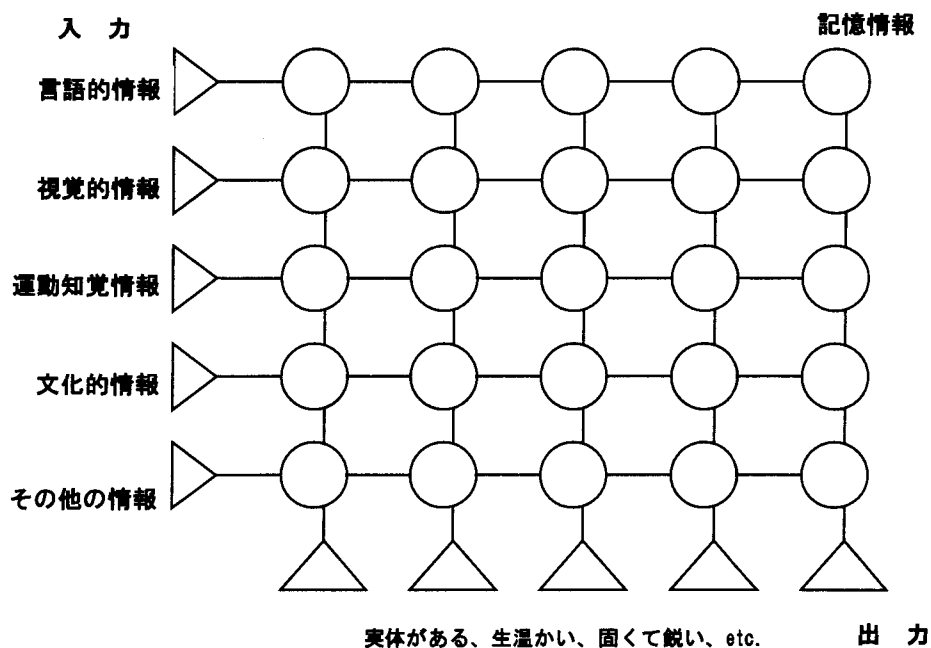


fig. 11 : 言語情報処理のネットワーク・モデル

こうした推察から、個々の想定しうる要因に関して実験なり調査なりを積み重ねていって、交錯している各要因間の相関性を洗い出す作業にはそれなりの意義があるだろう。

しかし、調査の過程で明らかになったことはやはり、表記の差が、集団的なイメージ生産の統計量として、ある種の傾向性を示すという点ではなく、むしろ個人差、そして同じ個人におけるイメージのゆらぎのほうだろう。また、イメージ生産があくまでも潜勢態であり、他の要因、たとえば文脈などに依存して顕在化する、ということも推測できる結果となった。

### 3. イメージ生産の多様性

#### 3-1. イメージのゆらぎと否定性

1-2 ですすでにふれておいたが、じつはかな表記の差異には、語彙論上の浸透度が大きく関与している。外来語や動植物の名前をカタカナで表記する、あるいは「きれる」と「キれる」を使い分ける、などは、語彙としてすでにすっかり定着しており、表記が何らかの感覚的なイメージを生み出すことはまれと言っていいだろう。

イメージ差を主眼とはしない表記の選択もある。文脈に依存した表記選択という場合がそうである。「さばさばとさばをさばく」、とはなんとも読みにくい。そこで、「さばさばとサバをさばく」、とすれば、読みやすさ倍増である。

これに対して、一般に流布はしていても、表記に集団的にブレが認められることばもある。たとえば、卵は「たまご」なのか、それとも「タマゴ」なのだろうか？ あなたは、なにか大きなショックを受けたときに、「がーん」と書くだろうか、それとも「ガーン」と書くだろうか？ 石は「ころころ」転がるだろうか、それとも「コロコロ」？ この場合、表記の選択は書く人に任されている。そこに明快な基準といったものはない。したがって、それを読むほうも、そこになにか定まったイメージを確実に読み取る保証はない。そればかりか、そもそも表記の差を感知するかどうか怪しいくらいだ。「ぞっとする」「ゾツとする」はこの類いだ。

さらに、まったく個人の気まぐれで表記が変わるケースも多数ある。私は、文章を書いているとき、あるいは誰かにメールを書いているとき、ふと、「コンピュータ」とではなく、「こんぴゅーた」と書くかも知れない。「私の名前はじろうです」とは書かずに、「私の名前はジロウです」と書くかも知れないし、「私の名前はジローです」と書くかも知れない。じつは日本語の場合、すべての単語は、潜在的にあらゆる表記を許容しているのである。この表記の気ままな選択は、ありとあらゆる日常的なシーンで現れるし、また、作家の場合にはテキストを決定する大きな要因ともなりうる。

私が表記を選択する際に、私のなかに伝達したいなにか確固としたイメージがあるとは言いがたい。なにか曖昧な、判然としない感覚があつて、しかし私はさしたる苦もなくある表記を選び出す。それを読む側は、したがってまた、私の表記選択に明確な意図、はっきりとしたイメージを読み取るとはかぎらない。つまり、発信する側も、受信する側も、かぎられたオプションしかない表記の可能性のなかで、そのイメージ空間はかぎりなくゆらいでいる。さらに、発信者があるときある表記を選んだからといって、その次もまた同じ表記を選ぶとはかぎらない。こうしたゆらぎの要素のうちいくつかは、今回のような実態調査によっていく分かは明らかにできるだろう。しかし今回の調査でも、明らかになったのは、イメージ生産に結びつく様々な要因というよりは、その要因が、そして今回測定できなかつたほかの要因が混じり合つてゆらいでいるという点だろう。さらに、テキストサンプルを変えれば、そのテキストサンプルに固有としか思われぬ、より多くの要因が不明瞭なかたちで掘り出されてくるだろう。その要因は、有限個ではあるかも知れないが、おそらく非常に多数ある。その上、そのひとつひとつが、あるいは複数個どうしが、インタラクションをくり広げていると思われる。

したがって、送信者は限られた表記のオプションのどれかひとつを、明確ではないイメージを投射して選び出し、それを見た受信者は、やはり同じ限られた表記のオプションを思い浮かべながら、その表記から、やはり明確ではないイメージを連想する、というのが実態だと思われる。ある表記がある特定のイメージと結びついている、というケースのほうが圧倒的に少ない現実を考えると、表記とイメージとの関係は、安定した一対一の対応ではなく、ソーシャルが考えていたような、否定的選択によるものと考えるのが妥当である。(fig.12)

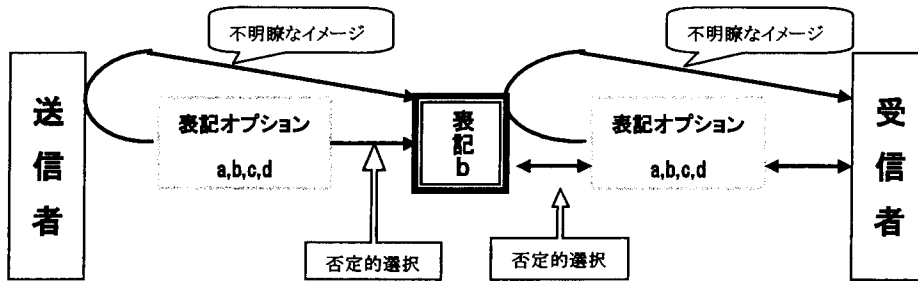


fig. 1 2 : 表記とイメージとのインタラクション

### 3-2. アフォーダンス理論の可能性

とりわけ日本で、古くて新しい観のあるGibsonのアフォーダンスという考え方<sup>2)</sup>は、生態学の分野に視知覚の知見を取り入れて、環境世界とのインタラクションをモデル的に描き出した点で画期的なものだった。引用されつくした観があるが、アフォーダンスに関する彼の考え方のポイントは、次の引用に簡潔に示されている。

陸地の表面が(傾いているかわりに)ほぼ水平で、(凸凹があるかわりに)ほぼ平坦で、(動物の大きさに対して)十分な広がりがある、(動物の体重に対して)その材質が固いなら、その表面は支えをアフォードする。(Gibson 1979, p.127)

彼は、このアフォーダンスという考え方を発案することで、動物がありとあらゆる環境世界を、うまく利用している様を描き出すことに成功した。こうしてGibsonは、動物(主観)対物理学的組成(客観)という単純な図式を打ち破って、たとえばヒトが切り株をイスとして使うこと、カラスが針金のハンガーを巣作りに利用することを、いとも簡単に説明しえたのである。

こうしてまんまと硬直した主観-客観の図式をご破算にしたGibsonだが、一方において彼は、やはり頑固な客観主義者でもあった。

おそらく表面の構造や配置は、それらの面がアフォードするものを構成している。ならば、表面を知覚するとは、表面がアフォードするものを知覚することである。これは極端な仮説である。なぜなら、これは、環境世界にある事物の「価値」や「意味」が直接知覚される、ということを示しているからである。さらにこの仮説は、価値や意味が知覚者の外側にあるということが、どんな意味を持っているのかを、説明することになる。(Gibson 1979, p.127)

生態学という立場から、動物の生存にとって必須条件である環境のニッチを考慮した場合、彼のこうした主張は確固たる妥当性を持っている。

さらに彼は、こう結論づける。

[さまざまなアフォーダンスは]観察者との関係において決まる事物の特性であって、観察者の経験の特性ではないことに注意せよ。これらは主観的な価値ではない。これらは、ニュートラルな知覚につけ加えられる快や痛みの感情ではない。(Gibson 1979, p.137)

この一節は注意深く理解しなくてはならない。一方において Gibson は、環境と動物とのインタラクションが重要であることを主張しているが、他方、そのインタラクションにおいては、つねに環境の側に優先的な決定権があり、したがって動物は、環境に自分の価値を積極的に投影するのではなく、価値はあらかじめ潜勢的に環境世界のほうに存在している、と述べているのである。これはどう考えても決定論的な環境観である。こうした決定論が単なる仮説にすぎないことは、生態学の世界ではまず常識といっていいただろう。そんなわけで、この一点のせいで、Gibson のアフォーダンス理論は、生態学の分野ではあまり評判がよくない。

こうした Gibson の主張は、人間工学や知覚心理学の分野に影響を与えた。たとえば Norman 1988 は、デザイン工学にアフォーダンスを応用し<sup>3)</sup>、また日本では、佐々木正人が、主に視知覚と運動制御との関係から、アフォーダンス理論を積極的に利用している<sup>4)</sup>。両者ともに、Gibson の正当な後継者と言ってよく、ともに理論の重要な部分からは「快や痛みの感情」が排除されている。Norman の場合、彼の環境世界は、実用性、使いやすさという縛りを受けているし、佐々木では問題は動作制御に集中している。この観点では、たしかに Gibson 流の決定論の欠陥は現れにくいですが、同時にまた、人間と環境との複雑な関係を描き出すには、限界もある。

話を表記に戻そう。表記差は、人間の基本的な(あくまでも、不都合がないように生存する、というところに限定した)生活状況にはさほど重大な帰結はもたらさない。しかし、他方において、表記差はいたるところに存在し、人はそれを好き勝手に利用し、好き勝手に処理している。

じつは、Gibson が提唱したアフォーダンス理論から、その決定論的な部分をとり除くと、こうした気ままさ、「快や痛みの感情」をとり入れた理論モデルが作れる可能性がある。生態学の分野でも認められ始めているが、じつは動物の行動にはかなりの自由度がある。動物と環境世界とのインタラクションは、必ずしも生存のための最適条件を、「対象的に」アフォーダンスとして事物にある「価値や意味」から選択しているだけではなく、それこそ「意味」のない関係性も取り結んでいるのである。人間はその最たるもので、その生活はけっして生態学的な意味と価値と目的によって満たされているわけではない。そこで、Gibson のアフォーダンスの定義を、大胆に次のように変更してみよう。

ヒトは、環境世界と、つねに最適生存条件に適合するように関わるわけではない  
ヒトは環境世界の事物の物理学的な諸条件に、ある程度まで拘束される  
その拘束を免れた部分で、事物はヒトにありとあらゆる知覚をアフォードする  
アフォードダンスは事物からヒトへのフィードフォワード的なインタラクションではなく、  
双方向的なインタラクションである。  
アフォードダンスには、感情が関与する。

この定義を、表記差の記述に用いてみよう。

表記は、受信者に、その知覚条件に限定された範囲内で、ありとあらゆるアフォードダンスを行う。受信者は表記にありとあらゆる意味、価値、感覚、感情、イメージを持ち込む。そのインタラクションの中で、受信者は、その表記の、感覚的に、あるいは感情的にもっとも好ましいと思われる要因を、好ましくないほかの要因を排除するというかたちで、選択的に受容する場合がある。このインタラクションの背後には、さまざまなパラメータが想定できるが、そのすべてが、つねに揺らいでおり、一義的なインプット→アウトプットモデルに到達することはない。この関係を、fig.13で示すことができる。

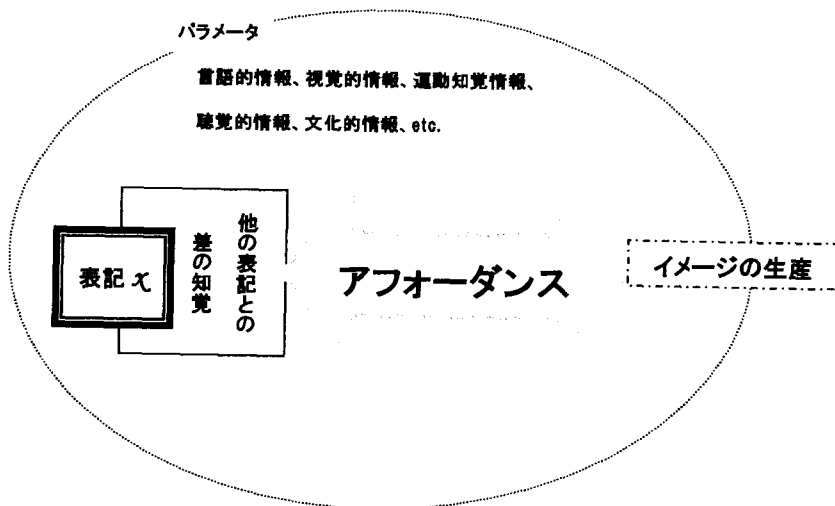


fig. 13 : 表記のアフォードダンス

#### 4. 結論

今回の調査を通じて、明らかになってきた点をもう一度まとめておく。

- 1 表記の差はイメージの差を生じさせる要因となっている
- 2 そのイメージは、表記のシニフィエが伝達する内容に変更を加える
- 3 表記の差が生み出すイメージは一義的には決定されない
- 4 表記の差が生み出すイメージは潜在的なものにとどまるケースがある
- 5 イメージは他の諸変数とのインタラクションのなかで、否定的選択によって顕在化する
- 6 インタラクションは、アフォーダンス理論の応用によってモデル化できる

今回の調査と考察を通じて、かな表記が生産するイメージ差に関しては、知覚される要素を丹念に分析していく要素還元的なアプローチには方法的な限界があることが予見されてくる。また、表記差以外にも、様々な要因が潜勢態でからみ合ってくる現象は、日常的な体験、ことに文学の受容などにおいてはむしろあたり前の事態であることを考えると、インタラクションのメカニズムの複雑さを解体せずに、複雑系としてそのまま記述する方法を開発する方がより現実的であろう。

## 注

- 1) 石原次郎／熊坂亮 2002 フォントの違いによるイメージの伝達効果. *独語独文学研究科年報* 29, pp.25-40.
- 2) Gibson, J. J. 1979 *The Ecological Approach to Visual Perception*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, London.
- 3) Norman, D. A. 1988 *The Psychology of Everyday Things*. Basic Books, New York.
- 4) 佐々木正人／三嶋博之〔編訳〕 2001 アフォーダンスの構想. 知覚研究の生態心理学的デザイン. 東京大学出版会.  
佐々木正人 2000 知覚は終わらない. アフォーダンスへの招待. 青土社.